



Title	中村本『夜寝覚物語』における幸福的結末の論理： 第二予言の表現と「結構」としての明石御方物語
Author(s)	中井, 賢一
Citation	詞林. 2003, 33, p. 14-28
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67497
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中村本『夜寢覚物語』における幸福的結末の論理

—第一予言の表現と「構構」としての明石御方物語—

中井 賢一

はじめに

周知の通り、中村本『夜寢覚物語』は、巻一冒頭の「空晴れ、月明らかなる折、あざやかなることを見るを、実夢と申して、これは疾く過ぎ事こそあれ、必ずむなしからずとぞ、」(三一九頁)⁽¹⁾という叙述と、巻五大尾「殿、上、栄え樂しみ給ふさま、昔も例少なくぞありける。かやうに夢は空しかぬ事と、ありがたくぞ侍りしとぞ。」(五五七頁)⁽²⁾という叙述とが呼応しており、「夢の効驗譚」ともいべき一貫した枠組みの中に、原作の物語世界が改変されつつ取り込まれているテクストと言える。河添房江氏は「夢により構造的変化を遂げた作品」と中村本を定位され、天人予言の夢の機能に注目された。物語の主題展開に機能的連関を果たす仕組みとして「構造」を措定するならば、源氏物語の例を持ち出すまでもなく、その「構造」は幾種にも及び且つ幾重にも構えられている可能性がある。氏の主旨は、「夢」が物語の最も大きな

外枠を規定する仕組みとしてある、ということであり、本稿においては、それを、種々の「構造」を大きく括し結びあげる枠組みという意味において「構構」と呼ぶことにする。

ただ、女君(寝覚の中君を本稿では以下「女君」と記す)の宿世を言い当てるはずの天人予言の夢を、そのように中村本の大きな枠組み、「構構」として位置付けるとき、特に物語後半において、それほど重い機能を担っているはずの天人予言が逆夢であったかのこととき印象があるのも否めない。琵琶の秘曲伝授に関わる第一予言は、石山姫君裳着後の十五夜の演奏によつて「音楽伝承譚」よろしく果たされていると見なすことができるのであるが、「あはれ、あたら人の、物を思ひ乱れ給ふべき宿世のおはするかな」(三三二頁)⁽³⁾という第二予言については、「殿、上、栄え樂しみ給ふ」という、いわゆる幸福的結末とは相容れないようと思われはしないか。第一予言に力点がおかれ第二予言は相対化される、といった類の解釈もここに起因すると思われ、この夢の位相について見極めること、そして、その「夢の効驗譚」という「構構」の機能につ

いて定位することが急務であると思われる。果たして第二予言は「相対化」され「逆夢」に終わるのか。あるいは、「逆夢」という捉え方こそが誤読なのか。誤読であるとすれば、なぜそのような表現がなされているのか。

また、中村本にも、原作本同様、源氏物語に依拠したと思われる設定や表現、いわゆる「源氏物語」取り（本稿ではこれより後「源氏取り」と称す）が随所に見受けられる。倉田実氏は「その（源氏物語の）影響下に成立した作品は、引用とずらしを方法化することで固有性を確保していた」と述べられ、

原作本対比は無論、鎌倉時代成立の改作本までをも射程に収めた、源氏物語以降作品における「方法」としての「源氏取り」の一般化を説かれたが、そうあってみれば、尚更、原作と結末が異なる中村本については、その論理について注意されねばなるまい。中村本における「源氏取り」の「方法」は、その結末の改変にまで影響を及ぼすものとして機能するのであろうか。あるいは全く別の論理に基づいて原作とは異なるた結末に向かうのであろうか。

中村本の「結構」と幸福的結末の論理、および中村本というテクストの性格について、以上の観点から考察する。

一 「思ひ乱れ」る女性像への改変

天人降下一年目の、いわゆる天人第一予言を引用しよう。

（中村本）

ふけゆくま、に、さながらうち臥し給ひたる夢に、同じ人おはして、「教へたてまつりしよりも、すぐれてあれなりつる琵琶の音かな。この御手ども、聞き知る人、えしもなからんものを」とて、いま五つ教へ給ひて、「あはれ、あたら人の、物を思ひ乱れ給ふべき宿世のおはするかな」とて、帰り給ひぬと見て、覚め給ひぬ。

（原作本）

例の御殿籠りたるに、ありし同じ人、「教へたてまつりしにも過ぎて、あはれなりつる御琴の音かな。この手どもを聞き知る人は、えしもやなからむ」とて、残りの手いま五つを教へて、「あはれ、あたら人の、いたくものを思ひ、心を乱したまふべき宿世のおはするかな」とて、帰りぬと見たまふに、この手どもを、覚めて、さらによどこほらず彈かる。

（四三一~四四頁）

両本の叙述を読み合わせたとき、中村本には「乱れ給ふ」とあり、原作本の「乱したまふ」とは異なっていることが知られる。四段動詞「乱す」から下二段動詞「乱る」への改変は、他動詞から自動詞への改変であり、そしてそれは他者の心を「乱す」文意から自らの心が「乱る」文意への改変を意味する。中村本は、別の場面、入道の心を女君が乱す、という文脈において他動詞「乱す」を用いているし、また、先に

見たとおり、「夢の効験譚」ともいべき「結構」の根幹に関する予言の叙述を書き誤るとも考へにくく、したがつて、この場面については中村本の論理に即して「乱る」に使い分けがなされたと推察される。つまり、この天人第一予言は、女君が心を「乱す」ことになる男君（中納言を本稿では以下「男君」と記す）の心のありかたではなく、あくまで心「乱る」当事者女君の「宿世」のありかたをこそ焦点化し、且つ主題化していると読まねばならないだろう。原作本には「ものを思ひ、心を乱したまふ」とあり、女君自身が「ものを思ひ、心を乱したまふ」とことと男君の「心を乱」すことが並立していたが、中村本においては見たとおり男君サイドの「乱された心のありかたに全く言及されていないこともその証左となろう。

かように、中村本における天人予言の夢は、「思ひ乱れる」女君の「宿世」のありかたを焦点化し、それを「夢の効験譚」ともいるべき「結構」の中に位置付けることで主題のありか

語における紫上らの述懐と原作本の女君の述懐とを比較したうえで、原作本寝覚が源氏物語の「女の物語」を取り込み主題化していると指摘されたが、中村本は、既に「結構」という物語の枠組みのレベルにおいて、女の「宿世」のありかた、

「女の物語」という主題性に焦点を絞り込んでいるテクストなのである。ただし、本稿はこの「女の物語」に関わった主題の定位を目的とするわけではない。その主題を語るための

中村本の枠組み、「結構」のありかたを明らかにすることにこそ目的はある。この視点から、再び天人第一予言の表現を読み比べたとき、いささか不自然な点に気づきはないか。中村本が、なぜ「物を思ひ乱れ給ふ」という叙述になつているのか、逆に言うなら、なぜ「物を思ひ給ふ」ではなかつたのか、という点である。前に見たとおり、原作本には「ものを思ひ、心を乱したまふ」とあり、前者が女君自身の心の問題、後者が男君の心に影響する問題、と分別されるのであつた。もし、中村本が女君の心のありかたの抽象だけを目的としているのであつたならば、男君の心と関わつた原作本の「心を乱し」の部分のみ切り捨てても十分その意を尽くせたのではないか。物語の枠組みを指定するべき予言の夢の言辞が、「物を思ひ給ふ」でなく「物を思ひ乱れ給ふ」であることの意味に思いを致さねばならないだろう。そのためにも、先立つて中村本の方法としての「源氏取り」について概観しておかねばならない。

二 「夢の効験譚」と

「住吉靈験譚」としての明石御方物語

原作本寝覚の物語世界は永井和子氏によつて「源氏物語字治十帖の色彩をついだ『あはれなる』⁽⁸⁾世界」と定位された。⁽⁹⁾その後、寝覚の女君に浮舟との類似性や宇治大君との類縁性⁽¹⁰⁾

を看取する指摘がなされ、原作改作問わず、寝覚の女君が生かされる物語世界が、いわば「宇治十帖」取りによつて紡がれている。という見方は一般化していると言つて良い。瀕死の病床で男君と相逢う場面、あるいは原作では欠巻部の、男君と左大将との板挟みの恋に苦しむ場面などは、その設定においても、あるいは表現においても、確かに宇治大君や浮舟の苦悩するありかたを想起させ、女の宿世のあやにくさを主題化する機能を果たす「宇治十帖」取りと言える。その意味において、それぞれの場面性に即した「宇治十帖」取りは中村本の物語「構造」としてあるということになろう。注意すべきは、女君が複数の源氏物語の女性のイメージをひとりで吸収する重層的人物造型がなされていることで、いわば様々なかタイプの苦悩を一手に引き受ける悲劇の女性像として形象化されていると言えよう。女君の悲劇性を炙り出す営為として宇治大君と浮舟のありかたを同時に寝覚の女君に付着させることは功を奏していると言える。本稿の趣旨とはやや逸れるが、中村本で大君と中君（女君）とが異母姉妹に改変されていることもこの点から了解できるように思う。受容者の視点で捉えるとき、女君に宇治大君のイメージが付着するのは男君の垣間見の際に箒の琴を弾いていることから理解されるとして、その同一人物に浮舟の属性を看取るとすれば、この女君が姉からみて同母妹でないことは最低限の条件であつたろう。同母であればどうしても宇治中君のイメージが勝つ

てしまう。それでは宇治の姉妹の楽器を取り替えた原作本と同趣向に終わる。つまり、中村本は、原作本から離脱すると同時に、女君に宇治大君と浮舟をより明確な形で重ねて見せるために宇治中君の属性をひとつ切り捨てたということにならうか。戻ろう。私が注意したいのは、寝覚の女君が宇治大君あるいは浮舟のいずれか一人のありかたに終始していない事実なのである。一人の人物像に固定されないこの女君の造型は、逆に言えば際限なく様々な人物像を付着しうる流動性を孕んでいるとも考えられる。「宇治十帖」世界において決して幸福であったとは言い難い宇治大君と浮舟のありかたと、幸福的結末を迎える中村本の女君のありかたとを比べ合はせたとき、宇治大君や浮舟とは別の人格のありかたが女君に付与されるがゆえに女君は「宇治十帖」世界から離脱し得た、と想像することもあながち的外れとは言えまい。

中村本においては「宇治十帖」以外の「源氏取り」を思われる場面も多く見られる。例えば、女君に求婚する左大将の「鬚黒らかにて、御歳も長け給ひたれば：」（四二二頁）という属性は、玉鬘への求婚に關わつて「年卅二三のほど」（藤袴卷一〇一頁）で「色黒く鬚がちに見えて、いと心月なし」（行幸卷六〇頁）と評される鬚黒右大将を、その官職とも相俟つて容易に想起させようし、また、東宮が石山姫君を寵愛する様子「ざるまゝには、明くるより暮る、までおはしまし、ある折は、やがて御殿籠り明かす折もある」（五五五頁）は、桐壺帝

が桐壺更衣を溺愛する様子「あるときには大殿籠り過してやがてさぶらはせたまひなど」(桐壺卷五頁)とあるのを想起させる。いずれも設定、表現とも似通った趣向と言つて良いだろ。つまり、中村本は決して「宇治十帖」世界のみに依拠した「源氏取り」を行つているのではなく、源氏物語正編世界をもはじめから攝取し、種々の場面「構造」として取り込んでいるのであつた。そうあつてみれば、中村本の「夢の効驗譚」としての幸福的結末が源氏物語正編世界から抽象されている可能性は十分に考えられる。

中村本大尾、「殿、上、栄え樂しみ給ふ」と評される直前の女君の歌は「うれしとも思ひ知らでややみなまし憂きに絶えたる命なりせば」(五五七頁)であつた。もし憂さに絶えてしまつた命であつたならば今の嬉しさを思い知ることもなかつただろう、という趣旨のこの歌は、現世において「栄え樂し」むことを喜びとすると同時に、来世への望みを恬淡に否定するものもある。もし憂さに命絶えても来世にそれ以上の喜びを期待する、などという来世信仰の姿勢は微塵も見られず、極めて現世利益的な思考と言わざるを得ない。この現世利益的な「夢の効驗」が、天人という超常的な力に裏打ちされて達成されるあたり、天女「かぐや姫」と重ねて把捉する向きもあるようであるが、与しない。女君が自らの妻(大君)の妹であると知つた男君は、女君の正体が分からぬ時のほう、かえつて、もしその正体を知つたならどのような苛烈

な場所へでも訪ねる、という強い情熱を支えに出来たのに、と悩むのであるが、その苛烈な場所の例として原作本では「蓬萊の山」(九八頁)が挙げられるのに対して、中村本では「虎臥す野辺、蓬が島、千尋の底」(三四一頁)と改変される。言うまでもなく、女のために「蓬萊の山」に分け入るというのは「竹取物語」のくらもちの皇子のエピソードを彷彿とさせる。中村本は原作とは異なつて、注意深く女君に「かぐや姫」の影が添わぬよう気を配つてゐると見たい。ともかく、源氏物語正編において、述べたような現世利益的な「効驗」が何か超常的な力の関与によつてもたらされる例と言えば、まず明石御方(本稿では以下「明石御方」と記す)の「住吉靈驗譚」が思い起こされるのではないか。明石御方は、須磨明石退去時の光源氏と結ばれ、明石姫君を出産し、その明石姫君が入内、立后することで権力の中枢へと押し上げられ、一族とも繁栄へと導かれる。「父君(明石入道)、ところせく思ひかしづきて、年に二度、住吉に詣でさせけり。」(須磨卷四〇~四一頁)とあつたとおり、父入道の指示ではあつたものの、年に二度は欠かさず住吉詣でを行つて願を掛けていたからこそ明石姫君入内後の「年ごろよろづに嘆き沈み、さまざまうき身と思ひ屈しつる命も延べまほしう、晴れぐしきにつけて、誠に住吉の神もろかならず思ひ知らる」(藤裏葉卷一九一頁)という明石御方の述懐が成るのであり、明石御方にとつてはまさに「住吉靈驗譚」として位置付けられてい

ると言える。須磨巻の時点では明石御方が具体的に明石姫君の顛末まで想定しているはずではなく、その「願」はおそらく父入道の意向どおり自らの将来に掛けられたものと思われ、当然その成就是明石御方その人の利益としてあり、明石御方もそれを住吉の「靈験」と見なしているわけである。のみならず、今、明石御方は「思ひ屈しつる命も延べまほし」と考えている。明石姫君入内にかかる「晴れぐしさ」がその喜びに拍車をかけるがゆえに、更に命を延ばしたいとまで現世に拘泥するのであり、明石御方の味わっている幸福があくまで現世において有意の性格のものであることが表明されていると言えよう。こういった、当該人物にまず帰納する現世利益的な幸福の享受、という点において、女君と明石御方とは類似した人物像としてあると言えるのではないか。このように考えたとき、そして中村本における「夢の効驗譚」という「結構」を「住吉靈験譚」に重ね合わせたとき、それぞれの超常的力学の関与する世界を生かされるふたりの女性像には様々な共通点があることに気づくのである。以下に特徴的な五点を挙げてみよう。

(i) 箏の才能に琵琶の才能が神秘的に付加される

明石御方は光源氏に明石入道から「(入道が)物の切にいぶせきおり／＼は、(箏の琴を)搔き鳴らし侍りしを、あやしうまねぶもの(明石御方)の侍こそ、自然にかの兄大王の御手に通ひて侍れ」(明石巻六六頁)と紹介されることで物語の表舞

台に登場する。この明石御方の才能は箏の琴にとどまらず、続く入道の「びわなむ、まことの音を弾きしづむるひと、いにしへも難う侍りしを、(明石御方は)おさ／＼とゞこぼることなう、なつかしき手など筋ごとにん。いかでたどるにか侍らん。」(明石巻六七頁)の言によつて、琵琶の才能も披瀝される。入道が「いかでたどるにか侍らん」と、教えてもいないので修得していることを不思議がついている点、特に注目したい。

中村本の女君は、「(父源氏太政大臣は)姉姫君には琵琶を教へ、おとゝは宮腹の御むすめ、それには箏の琴教へ給ひつゝ」(三三〇頁)と箏の琴の技芸を設定された上で、その才能に天人が感心し琵琶の秘曲を授けられることになり、その演奏は父に「琵琶をば、未だ教へき」とえざりつるを、誰が教へたてまつりて、これ程めづらしき手をば、弾き給ふにか」(三二二頁)と言わせるものであつた。琵琶の教授なき修得を父が不思議がるという趣向は源氏物語と軌を一にする。

第一の才能が箏の琴、それに付加される第二の才能が琵琶、それも決して父が教え込んだものでなく不思議な熟達の仕方をする神秘性を有すること、これらの点に注意したい。

(ii) 箏の才能に男君が惹かれる

明石御方への興味が高まつた光源氏は「この此の波のをとに、「かの物の音を聞かばや。さらばは、かひなくこそ」(明石巻七五頁)と言つ。『かの物の音』を琵琶の音と解釈するこ

ともこの場面だけからは可能であろうが、後に明石御方と逢う際に「この聞きならしたる琴をさへや」（明石巻七七頁）と言つていて、光源氏が明石入道から噂として「聞きならし」といたのは箏の才芸についてであつたことが分かり、したがつてまずそこに光源氏の興味が向いたと考えるのが自然であろう。

中村本においては、男君の視点に即した叙述で「琵琶の音も悪しからねど、時々搔き合はせらるゝ箏の琴はすぐれでありがたく聞こふる……」（三三二五頁）とあり、女君の箏の琴に男君が興味をもつたこと、明らかである。

女君と男君とを結び付けるものが箏の才能であつたこと、しかも、いすれも琵琶の才能も備わつてゐるうえで琵琶ではなく箏であったこと、など注意したい。

（三）姫君の誕生が繁栄をもたらす

光源氏と明石御方には明石姫君が、寝覚の男君と女君には石山の姫君が誕生する。両姫君とも十一歳になる年の四月に入内し、それぞれの一族の繁栄に立ち働くキーパーソンとなる。なお、両姫君とも袴着の腰結は中宮が務めるのであるが、光源氏が「（中宮の腰結は）後の世のためしにやと、心せばく忍び思たまふる」（梅枝巻一五九頁）と述べているとおり、中宮の腰結というのは「後の世のためし」と見なされるほど極めてまれな例であつたことが知られる。そうであつてみれば、この共通性には注目すべきであろう。

（IV）「子持ち」と称される

明石姫君出産後の明石御方の様子は「子持ち」の君も、月ごろ物をのみ思ひしづみて、いどゞよはれる心ちに、……（源標巻一〇四頁）と語られる。明石御方が「子持ち」と呼ばれるのはこの場面だけである。源氏物語全編を通じて、他に「子持ちの御方」という用例が、薰出産直後の女三宮と若宮出産直後の宇治中君に、いずれも産養の叙述において見られるが、いうまでもなく姫君の母を「子持ち」と呼んでいるのは明石御方の例のみであり、その意味で明石御方の属性を規定する特異な叙述と見られよう。

中村本においては、小姫君（石山姫君の妹）出産後の女君の様子が「子持ちの、なごり苦しく弱げにて臥し給へる」（五四三頁）と記される。中村本においても女君を「子持ち」と称するのはこの場面のみであり、ここにも両者の類似が見て取れる。

ただ、なぜ寝覚の女君が石山姫君出産直後に「子持ち」と呼ばれていないのか、疑問に思われるところではある。先に見た源氏物語の三例は、いすれも産養の時期であるから、出産直後、あるいは極めてそれに近い状態の母について使用される語であることが分かる。しかし、寝覚の女君は、その時期、自失状態のまま石山姫君と引き離されているのであり、石山姫君の母という属性からは極めて遠い位相にあつた。この時期、母としての位相にない者を「子持ち」とは呼び得ない。

かつたということなのではないか。あるいは、物語の論理として、女君をまだ「母」としてではなく「女」として生かさねばならなかつた、ということかもしれない。「子持ち」の語が小姫君出産時に転用されるのは、もはや女君の「母」の位相こそが強調されるべき展開に物語が至つてゐるからである。例を挙げよう。左大将（この時閑日）の大君が男君と結婚することになつた際、もし女君の位相が男君を恋い慕う「女」に傾斜していたのなら、さすがに辛いはずであろう。にもかかわらず女君は「げに扱もあらば、そのゆかりにむづび寄りて、あひ見がたき姫君を見ることもありなんかし。」（四八五頁）と、まず石山姫君と会う機会を捉えている。「母」としての感情が優先されている。少なくともこのあたりでは、女君は「母」の位相を肥大化させた人物像として描かれていると言える。しかし、石山姫君出産時点では、まだこのような境地に至ることを許されず、「女」でなければならなかつた、ということにならうか。

(V) 姫君を「小松」と呼ぶ

石山姫君の成長ぶりを女君に見せたいと思う男君は「見せばやな小塙の山の姫小松神さびゆかん千代のけしきを」（三六六頁）という歌を贈り、女君も「例ならず目とどめたま」う（三六七頁）。原作本ではこの歌は「よそへつつあはれとも見よ見るままにほひにまさるなでしこの花」（一九三頁）であり、この「なでしこの花」から「姫小松」という改変につい

て石楚敬子氏は「新しさをねらつたのであるが、一中略【例ならず目とどめたまふ】の微妙な心理は単純なものになつてしまつてゐる」と評され、場面の情趣を減じた改悪と見ていられるのが果たしてそうであろうか。

明石御方の明石姫君との子別れの場面で光源氏が詠んだのは「生ひそめし根もふければ武隈の松に小松の千代もならべん」（薄雲卷二二一頁）という歌であつた。「武隈の松」が光源氏と明石御方の喻であり、したがつて「小松」が明石姫君の喻となつてゐること、明白である。歌中に用いられる「千代」という語彙からも、中村本がこの歌を前提としていると考えるのは妥当であろう。中村本、源氏物語とも、女君と関わつた男君の目によつて姫君が「小松」と称されている。思えば、初音巻において明石御方に明石姫君から直筆の手紙が来る場面で、その手紙を明石御方は「小松の御返り」と呼んでいた（初音巻三八三頁）。源氏物語では明石御方の視点からも「小松」と言われ、明石姫君に付着する語として定位されていると言えよう。源氏物語全編を通して「小松」の用例は七例⁽¹⁾で、うち一例は「小松原」、植物の松を直接指すものが二例。人物の喻として用いられるのは五例で、前に挙げた明石姫君を指す二例を除くと三例とになる。この三例の内訳は、ひとつが夕霧雲居雁夫妻で、残る二例が玉雲の子供たちである。ひとりの姫君を単独で「小松」と呼ぶ例は明石姫君以外に見られない。中村本にある「姫小松」というのも

「小松」がひとりの「姫」としてあることを定位する語り口である。源氏物語における「小松」が明石姫君を特に指示する語彙として位置付けられることは疑いなく、よって石山姫君と明石姫君とは重ね合わされることになり、必然的にその母女君と明石御方とも重ね合わされているということになる。

以上、五つの観点から女君と明石御方との類似性について見てきた。ここに挙げた他にも、父が入道すること、父の思ひ入れが極めて強くその父の意向に縛られること、「さいはひ人」と呼称される場面があること、等、瑣末な点も含めればふたりの類似点は実に多い。中村本が意識的に明石御方の人物像を女君のそれとして吸収し重ね合わせていることは間違いないと言つて良がろう。

明石御方が光源氏や明石姫君との関係性において現世利益的な繁栄を遂げることが「住吉靈驗譚」という構造に保証されるゆえであるならば、中村本においては「夢の効驗譚」という構造こそが女君の幸福的結末を保証すると言える。だからこそ中村本は女君に明石御方の人物像を重ねるのであり、それはとりもなおさず中村本の枠組み、「結構」としての「夢の効驗譚」そのものが、明石御方における「住吉靈驗譚」を取り込んだものであることを意味するのであった。

つまり、中村本の「源氏取り」は、かように明石御方の「住吉靈驗譚」を「結構」として撰取し、物語の主題性や場面性

に即して、適宜「宇治十帖」をはじめとする源氏物語の場面「構造」を換骨奪胎しつつ散りばめるという方法に則つて成立していると考えられるのである。しかし、このように中村本の「源氏取り」の方法をひとまず定位したところで、疑問が霧消するわけではない。天人第二「予言との関わりである。中村本の女君が生かされる「思ひ乱れたまふ宿世」は、やはり幸福的結末を保証する「夢の効驗譚」の枠組みに嵌め込まれているのであり、それが「住吉靈驗譚」に裏打ちされたからといってその不自然さが水解するわけではない。果たして何ゆえ「思ひ乱れたまふ宿世」という表現になつているのであろうか。

三 ふたつの「思ひ乱れ」の女性像と中村本の「結構」

再び天人第二予言の夢を想起しよう。「あはれ、あたら人の、物を思ひ乱れ給ふべき宿世のおはするかな」と天人は女君の宿世を告知した。この予言は、前に見た「夢の効驗譚」という枠組みによつて実夢であることを保証されねばならないはずである。現に秘曲相伝といつ第一予言は「音楽伝承譚」の形で実現した。中村本が「夢の効驗譚」という「結構」によって原作本を脱構築したテクストである以上、この第二予言のみが実現しないとはどうあっても考えられない。

繰り返すが、中村本にとつてこの予言の夢は特別な位相に

あるはずであり、よつてその表現は中村本の論理と関わるものであるはずである。中村本の「夢の効驗譚」を支え裏打ちする枠組みが「住吉靈験譚」の論理であり、それゆえ女君に明石御方との類似性が付与されているとするなら、女君の「宿世」の枠組みも明石御方のそれと関わっているのではないか。明石御方に付着する語として「思ひ乱る」があつたのではないか。

人物名	頻度	8回	7回	5回	3回	2回
	浮舟	宇治大君	明石御方	空蝉	紫上	落葉宮
		宇治中君	臘月夜			六条御息所

右は源氏物語において、「思ひ乱る」と叙述される女性について、その叙述頻度順に一覧したものである。当然ながら物語受容者は数多く「思ひ乱る」と叙されるほどその人物像を「思ひ乱る」女性として定位していく。ゆえに、地の文・会話文を併せた叙述の「頻度」を重視した。見ての通り、最も多く「思ひ乱る」のは浮舟であり、次が宇治大君である。ここに、中村本が多く「宇治十帖」取りをしている論理が透視できるようと思われるが、それ以外にも、一覧に名を連ねる女性を思い起こさせる叙述が中村本には散りばめられていることに気づく。例えば、石山姫君出産直前の女君の衣を男君が持ち帰った場面、「形見の衣のなつかしさを、ただあた

りにおはするやうに、慰み給ふ。顔に押し当て、…」(三五七頁)などは、光源氏が空蝉の小挂を持ち帰り「ありつる小挂をさすがに御衣の下に引き入れて…」「かの薄衣は小挂のいとなつかしき人香に染めるを、身近く馴らして見ゐたまへり」(空蝉卷九三貢)と叙される場面を連想するし、あるいは、左大将との結婚が決まった女君が男君と再会を果たす場面、「女君も、何ばかり積もらぬ齡ながら、世の憂きも辛きも受け暮れ嘆きつゝ、身を馴らはし給ひければ、あはれるなるふしぐも、思ひ知り給はぬにしもあらねば、「こはあるまじきことぞかし。またも憂き名よ」とおぼし乱るれどひたぶるにおそろしくなどはあらで、さるべきふしなどは、いらへ給へる…」(三九九貢)と、男女の仲の嘆きを知ることで男君への愛情を深め、あつてはならないことと自省しつつも久々に逢う男君の愛を受け入れてしまう、という心の動きは、久々に光源氏と逢う臘月夜の「年ごろは、さまざま」に世中を思知り、来し方をくやしく、公私のことにつれつゝ、数もなくおぼし集めて、いといたく過ぐし給にたれど、昔おぼえたる御対面に、その世もとをからぬ心地して、え心づよくももてなし給はず(若菜上巻二五三貢)といふ場面の心の動きとその設定までもが酷似している。前に横井氏の御論考に触れたが、女君の述懐はそのまま若菜下巻の紫上の述懐を連想させるし、女君への恋に心惹う男君に正妻大君が折に触れ皮肉を言うところなど、落葉宮に恋慕する夕霧とそれに嫉妬する雲居

雁の三角関係を目の当たりにするようである。男君と女君の夫婦仲を妬んで出現する左大将の死靈の、遺児の養育を感謝しつつもふたりの昔語りに我が身の辛さを引き比べて羨望する、という訴えの展開なども、男女の相違はあるものの、秋好中宮の後見を感謝しつつも光源氏と紫上の昔語りに触発されて紫上に取り憑こうとする六条御息所の死靈の訴え方を模倣しているようにも思える。これらの女性たちは、浮舟と宇治大君も含めて、状況や程度に差こそあれ、源氏物語において、恋に関わる苦悩の体現者であると言えるようと思う。少なくとも、現世において恋の苦悩が幸福的に止揚される宿世を生かされていない女性たちであると言えるだろう。

ところが、そういった女性たちはやや異なった「宿世」を生かされる人物も、「思ひ乱る」と頻繁に叙される女性の中に存在するではないか。明石御方と宇治中君である。確かにこの二人も光源氏や匂宮との恋に関わって苦悩させられてはいる。しかし、前に見た女性たちとの決定的な相違点は、男君との間に子が生まれること、そしてそれが地位の好転の契機となることである。明石姫君の入内に際して明石御方が現世利益的な喜びを嘔みしめることについては前に述べたが、宇治中君も、匂宮との間に若宮が生まれ、少なくとも物語上では匂宮と夕霧の六君との間に子がない今まである以上、その地位は揺るがないと見ねばなるまい。その意味において、宇治中君も明石御方と類似していると言えるのであ

る。ただし、寝覚の女君が宇治中君の宿世のありかたこそを主に背負うとは考えにくいだろう。第一にその子が姫君でなかつたこと、第二に何らかの超常的な効験としてその現世利益的幸福が機能していないこと、第三に寝覚の女君の描写が宇治中君のそれと遠いこと、などが挙げられようか。第一第二の理由については例示するまでもあるまい。第三の理由について触れておこう。前に、明石御方と女君の類似を明石姫君と石山姫君の類似から説明したが同様に考えてみる。もし寝覚の女君に宇治中君の人物像が重なるとすると真砂君が中君の若宮に相当することになるが、真砂君の誕生は「玉光るやうなるおのこ子、むまれ給ひぬ」(四三八頁)とあり、むしろ光源氏の誕生場面「世になくきよらなる玉のおの子御子さへ生まれ給ひぬ」(桐壷巻五頁)の描写を連想させないか。また、真砂君は七月誕生、若宮は一月誕生であった。真砂君に若宮の人物像は重ねにくく、したがって女君と宇治中君の重なりも大きいとは言えないであろう。前に少し触れたが、異母姉妹への系図変更も宇治中君と寝覚の女君とが重なりにくくなる要因と言えよう。

つまり、寝覚の女君が天人第二予言で「思ひ乱る」と叙されたのは、明石御方が「思ひ乱る」の語によつて人物像を指定される女性⁽¹⁾だったからではないか。光源氏との恋ゆえ身の程意識に苛まれつゝも「住吉靈験譚」に保証される形で明石姫君を通して現世利益的幸福の喜びの直中に身を転じること

ができた、浮舟たちは異質の、「もうひとつの「思ひ乱る」女性像」として明石御方はあるのであつた。

中村本における「源氏取り」は、「住吉靈験譚」に裏打ちされた「夢の効驗譚」という「結構」の内部に、「宇治十帖」あるいは源氏物語正編的印象的場面を散りばめるという方法によつて支えられていた。それは、恋に関わつて苦惱の宿世に「思ひ乱る」女性像が、苦惱の果てに現世利益的幸福を摑む「宿世」にある「もうひとつの「思ひ乱る」女性像」の中に、あくまでその苦惱の具象として引用され組み込まれているに過ぎないとも言えるのではないか。無論、これら「思ひ乱る」女性以外の「源氏取り」も多くある。女君にこれら以外の女性像が透視できる場面もなくはない。しかし、それらの「源氏取り」は、中村本の枠組み、「結構」としては関与せず、あくまで挿話的に配置されるに過ぎない。中村本の「源氏取り」には、物語構造の視座からは様々なレベルが存在するということになろう。かような「源氏取り」の方法こそが中村本の論理を支えていると考えるのである。穿った見方ながら、この方法によって中村本は苦惱の宿世に「思ひ乱る」源氏物語の女性たちの救済を達成しているようにも思えるのであり、あるいはここに中村本の論理が始発しているのではないかとの念もよぎるのではないか。早計に過ぎようか。

四 中村本というテクストの性格

ここまで見てきたとおり、中村本は、原作本とは全く別の論理に基づいて源氏物語を取り込み、それを物語の枠組みとして利用している。それゆえ、ある意味原作本以上に源氏物語に沈潜したテクストであると言つて良い。しかし、そうあつてみれば中村本の独自性というのはどこにあるのであるか。源氏物語を解体し女の苦惱の物語を現世利益の「夢の効驗譚」に組み換えたというだけなのだろうか。実は非常に興味深い例があるのである。

・御腰結には、なべてならぬあつ物におはしませば、中宮えぬを申させ給ふ。
(四五九頁)

・姫君、中宮の御前に参り給へるを、見たてまつり給ふに、
うつくしなどいうはかりなし。いよ／＼母君ゆかしく、
思ひやらせ給ふ。御腰結おひこ給う事ごたまふ事、例にまかせて、
事終はりぬ。
(四五〇頁)

石山姫君の袴着において腰結を中宮が務めていた、といふ叙述である。前に、石山姫君、明石姫君とも袴着においては同じく中宮が腰結を務めたという共通性を指摘したのであつたが、では明石姫君の袴着では誰が腰結を務めたのか。

「いはけなげなる下つ方もまささらはさむなど思ふを、めざましとおはさずは引き結ひたまへかし」と聞こえ給ふ。

光源氏が明石姫君の引き取りを紫上に切り出し、養女とし

ての養育を依頼する場面である。実際の袴着の叙述には腰結役が誰であつたか明示されていないが、ここにあるとおり紫上が務めたと考えるのが自然であろう。無論、紫上は光源氏にとつて重要な位相にある女性である。しかし、中宮との身分的懸隔は歴然としている。これも前に見たが、裳着における中宮の腰結が「後の世のためし」になるほど特異なことなのであるから、まして袴着なら推して知るべしである。石山姫君は明石姫君を超える存在性を付与されていることにはりはしないか。そして、その母、女君は明石御方を超越する存在性を付与されることになりはしないか。

あるいは、興味深い叙述は他にもある。物語大団円近く、昔語りをしつつ、男君が女君からの返事の手紙を全て残していると言い、女君側も男君からの手紙を全て取り置いていふる、と応じた場面、そのあと次のようによく叙される。

源氏の絵合はせは、わが嘆き過ぐし給ひもありさまをこそ描かれけれ、これは、年ごろあはれなりし事どもを、

たがへず見給ふ御心の中、いといみじ。
(五三五頁)

ふたりのやりとりした手紙は、光源氏の須磨の絵日記に比較される。おそらく、「絵をさまざまに書き集めて、思ことどもを書きつけ、返こと聞くべきさまにしなし給へり」(明石巻八〇頁)とある、紫上の、都で書き綴つた絵日記も含まれていよう。つまり、夫婦間の交流という観点から比較した上で、源氏物語の絵日記では嘆き過ごした様子が描かれているに過ぎない

が、男君と女君の手紙には長年の様々に心動くあれこれを同じように見つめてきた心の交流が描かれており、その意味でたいそうすばらしい、と評価されていると解釈できよう。これは、源氏物語の相対化などといった程度の把握では済まされないのではないか。これは、源氏物語に描かれた光源氏と紫上との結びつきのありかたを超越するそれとして中村本の男君と女君との恋物語が位置付けられるとの言挙げに他ならないのではないか。

このような叙述から、中村本の独自の位相が見えてくるようと思われる。中村本の物語は、源氏物語の達成した榮達のありかた、あるいは恋のありかたを超克する試みなのではないか。改作という當為には多かれ少なかれ原作に対する超克の試みが内在するに違いない。無論、中村本においてもそれは例外ではない。しかし、中村本にとっての原作とは、あくまで源氏物語世界への途上に通過する一つの足掛かりに過ぎず、従つて中村本が超克を試みるのは源氏物語の到達した世界であつたということになる。このように考えてみると、なぜ中村本のテクストが「結構」も、そして具体的場面「構造」や表現についても「源氏取り」するのか、腑に落ちるように思われる。源氏物語の達成を源氏物語内部の論理を用いて脱構築し、その上でそれ以上の可能性を提示する。源氏物語に依拠しつつ源氏物語の超克を志す。もし中村本のテクストがそういった試みの所産であつたとするなら、いささか逆説的

ではあるが、これこそが中村本の独自性であり、達成であつたと言ふことになろう。

おわりに

天人予言の表現と中村本における「源氏取り」の論理について、主として考察してきた。中村本がなぜ幸福的結末に収束するのか、その「結構」と論理、あるいはそこから透視されるテクストの性格が、いささかなりとも明らかになつたことを考へる。

天人第一予言の夢は決して「逆夢」などではなかつた。第一予言と相俟つて「夢の効驗譚」という枠組み、「結構」を支え、且つその中で生かされる女の「宿世」——「もうひとつの『思ひ乱る』女性像」——こそを照射し、主題に据える機能を果たしているのであつた。

中村本の物語世界を「源氏物語」の世界からの離陸⁽¹⁾と捉える観角も呈示されはいるが、それはあくまで物語の大小幾多の「構造」、設定、表現等、様々なレベルにおいて源氏物語に依拠しつつ、それでいて源氏物語の到達した世界を超える、という意味においてでなければならない。そして私はちはその意味においてこそ中村本の独自の達成を定位しうるのだと言ふよう。

なお、本稿においては女君の心に分け入つてこの物語の主

題性を辿るという段階には至らなかつた。女の「宿世」の問題を考える際に、やはりそれは欠くことのできない視角であろう。あるいは、なぜ中村本が神仏靈験譚でなく「夢」をその「結構」と連動させるのか、これも忘れてはならない視点である。時代背景とも関わつて考証すべき問題は多い。次なる課題として稿を改めたい。

注

(1) 引用の中村本「夜寝覚物語」本文及び頁数は「鎌倉時代物語集成第六巻」(笠間書院)に拠り、本文の引用に際しては私に表記を改めた。

(2) 石塙敬子氏「改作本「夜の寝覚」を中心にして」(「中世王朝物語を学ぶ人のために」世界思想社 平成9年9月)

氏は「原作「寝覚」は、序跋によつて形成された改作の枠内にはめこまれ、座談の場で話題に上つた「実夢」の一例証に過ぎない存在となるのである。原作の世界は、改作の一部となり相対化されることになった」と説かれる。氏の言われる「実夢」の一例証⁽⁴⁾が、中村本の物語のモチーフであるという意味において「夢の効驗譚」と称することにする。

(3) 河添房江氏「中村本寝覚物語」(「体系物語文学史第三巻」有精堂 昭和58年7月)

(4) 乾澄子氏「夜の寝覚」と改作本「夜寝覚物語」——「寝き」女から「寝きにたへたる」女へ——(「新物語研究2 物語—その転用と再生」有精堂 平成6年10月)

(5) 倉田実氏「源氏物語」以後の物語文学」(「国文学解釈と鑑賞」)

(6)引用の原作本本文及び頁数は【日本古典文学全集】(小学館)に拠る。なお、底本は五巻本系島原本である。

(7)(入道)「……うつくしくらうたき所は、(女君は)人に優れぬべか

めりと、うしろやすく思ひしに、心たて、うとましき所のお

はしけることぞ心憂けれ。とてもかくても、(女君が)わが心を乱

しつくし給ひける人と見果てつれば、いとづらくなん思ひなり

ぬるを、つくべ」といひしらせばやと思ふも、さすがに向かひ

ぬれば、(女君の)うつくしさに忘れて、…」(四三四～四五五頁)

(8)横井孝氏「母性論としての寝覚物語」(円環としての源氏物

語)新典社 平成11年5月)

(9)永井和子氏「寝覚物語の主題とその発展」(『寝覚物語の研究』

笠間書院 昭和43年7月)

(10)池田和臣氏「源氏物語の水脈—浮舟物語と夜の寝覚—」(『国

語と国文学』昭和59年11月)

(11)鈴木紀子氏「夜の寝覚」と「源氏物語」宇治の姉妹—同母姉

妹への関心—」(『王朝本学の本質と変容散文編』和泉書院 平成

13年11月)

(12)引用の「源氏物語」本文及び頁数は【新日本古典文学大系】(岩

波書店)に拠る。

(13)「源氏物語」において「子持ち」の用例が出現する頁数を示す。

柏木巻一二頁 宿木巻九九頁

(14)前掲(2)と同じ。

(15)「源氏物語」において「小松」の用例が出現する頁数を示す。

薄雲巻二二一頁 初音巻二八〇頁 初音巻二八三頁 藤裏葉巻一

九五頁 若菜上巻二三五頁 若菜上巻二三六頁(「小松原」) 浮舟

(16)藤裏葉巻一九五頁「そのかみの老い木はむべも朽ちぬらむ植ゑし小松も苦生ひにけり」「老い木」が致仕太政大臣夫妻で「小

松」が夕霧雲居雁夫妻

若菜上巻二三五頁「若菜さす野辺の小松を引きつれでもとの岩根をいのるけふかな」「もとの岩根」が光源氏で「小松」が玉

鬘の子供たち)

若菜上巻二三六頁「小松原末のよはひに引かれてや野辺の若菜も年をつむべき」「野辺の若菜」が光源氏で「小松」が玉鬘の子供たち)

(17)明石御方が「思ひ乱る」と叙される場面の頁数を示す。

松風巻一九〇頁 松風巻一九二頁 松風巻二〇四頁 薄雲巻二

一六頁 薄雲巻二七頁

(18)乾澄子氏「夜の寝覚」—「模倣」と「改作」の問—(『日本

文学』平成8年1月)